





国 語 問 題

はじめに、これを読むこと。

(注意事項)

1. この問題用紙は二七ページまでである。
2. 解答用紙に印刷されている受験番号が正しいかどうか、受験票と照合し確認すること。
3. 解答用紙の所定の欄に氏名を記入すること。
4. 解答は、すべて解答用紙の所定の欄にマークするか、または所定の欄に楷書で記述すること。(解答用紙は表裏両面にある)
5. 解答は、必ずHBの黒鉛筆を使用すること。
6. 訂正は、消しゴムできれいに消し、消しきずを残さないこと。
7. 解答用紙は、絶対に汚したり折り曲げたりしないこと。また所定以外のところには、絶対に記入しないこと。
8. 問題に指定された数より多くマークしないこと。
9. 解答用紙は、持ち帰らないこと。
10. この問題用紙は、必ず持ち帰ること。
11. この試験時間は、六〇分である。

(マークの記入例)

良い例	悪い例
	  

次の文章は一九七〇年代に発表されたものである。そのことを念頭に置きながら次の文章を読み、後の問に答えなさい。

怪獣映画は一九七〇年代のわれわれ自身にとっていかなるメッセージをあらわしているだろうか。深くわれわれの内部にひそんだ無意識の暗号を、あるいはわれわれの個人を超えたこの社会全体の圧力の情報を？ アリブントは、ドラゴリーは、カメレキングは、ガランは、泡怪人カニバブラーは、鳥人ギルガラス、そしてすでに古典となっているゴジラ、ラドン、アンギラスは……

怪獣映画の「造られた世界」を構成している要素はいうまでもなく、怪獣だけではない。しかしまず怪獣たちに最初の光をあてるとして、かれらを造った大人の想像力はどのようなものだろうか。子供たちの想像力は、それをどのようにむかえているだろうか？ かれら怪獣たちは、僕の見ることができたかぎりその根本のところでは、Aな生命である。核爆発の放射能が、火山の爆発のエネルギーが、あるいは他の惑星における特殊な環境が、また気狂い科学者の科学的処置が、かれら怪獣をつくりだした。しかしそれらの生命そのものまでが発明されたのではない。かれらは通常の生命をそなえて生れる過程で、あるいは生れたあとで、時には数千万年にわたる仮死状態をつうじて、怪獣になりお世話なのである。

なかでも放射能を大量にあびることによって怪獣となってしまった生命体という発想はしばしばあった。なかには直接、広島・長崎における被爆者たちにたいして、また被爆二世にたいして差別的である発想すらもあらわれた。それらは核兵器の人類にあたえる悲惨についての、Bな認識に立たぬことにおいて、根本的に差別的であった。しかもなお被爆という

ことについて、いいかげんにタカをくくったモウソウをくりひろげることにおいて、むしろ悲惨の拡大を望みもとめるような想像力のたてかたにおいて、細部の発想のすみずみまで差別的であった。現実には根づかず原理にそくしていない「被爆」のつたえかたにおいて、広島・長崎の経験の子供たちへの伝承の、まともなかたちをおしつぶす可能性を考えれば、それは未来にわ

たつても差別的であった。そしてこの差別的な性格は、直接に被爆者であつたのではない発想においても、放射能と怪獣というむすびつきが考えられているあらゆる怪獣映画において、あらためて検討されねばならぬであろう。

それを考えたうえでのことであるが、怪獣の出現の惧れを、核兵器の悲惨への惧れとかさなるようにして、怪獣映画を造り、テレヴィの前でそれに釘づけになる、大人および子供の存在は否定できないはずである。それはいわば、この世界を覆っている巨大な核兵器の影への、漠然たる恐怖を想像力の呼び水として怪獣映画が造られ、見られているということの意味する、といつてすらもよいであろう。まともな人間規模の力によつてはそれに対抗することが絶対不可能である巨大核兵器。その存在への、日本人一般の無力感と、それは照応するにちがいない。怪獣が暴れまわるのみで、ついに三十分番組の終りまでウルトラマンもミラーマンもあらわれることのない映画を考えてみるべきであろう。この怪獣どものまえで、ウルトラマンの助力なしに、われわれになにができるか、と無力感にただ暗然と滅亡を待つ人間たち……

現にこの一九七〇年代に生きている日本人にとつて、真の怪獣・核兵器の存在は巨大に C に確実であるのに、現実生活においてわれわれにウルトラマンもミラーマンも実在していないことは確かなのだから、^②「怪獣映画という「造られた世界」において、あのようにも暴力において大きい怪獣を造りださざるをえない人間の、想像力の基底にある暗さ、悲惨さは、それを見すすわけにゆかない。テレヴィの前では、大いなる恐怖につづく豊かな安堵の X をあじわう子供たちも、もしかれらが正当に核兵器の脅威について教育を受けるなら、自分たちがそのような奇怪なものにウルトラマンなしで(一)対峙しているのだということを、認める目をもたないわけにはゆかぬだろう。逆にいえば、そのような現実的対応物が、この世界にのしかかっているからこそ、地球破壊、人類滅亡の危機の具体化である怪獣の繰りかえされる出現が、この「造られた世界」を造る大人たちに、それをテレヴィの前で待ちうける子供たちにも、たとえ D であるアクチュアリテイであれ、深く強くその現実感をもつのではないであろうか？ 核兵器による恐怖の均衡の時代が始まる前に、どうして子供たちのための文化

の世界に、毎週しかも毎日のように、地球の全面的破壊の危機が繰りかえし描きだされることがありえたろう？

(中略)

いうまでもなく怪獣映画は、怪獣群のみによってなっているのではない。かれらの暴力的侵略から地球をまもり、人類を救うウルトラマンやミラーマンの活躍が、実際の X の根幹を構成する。怪獣たちが、おそるべきエネルギー量をたくわえ、およそ動物的限界を超えた、全地球上の鯨の力の総和にもあたるような体力をそなえてすらいるにもかかわらず、ほとんどつねに実在の動物(あるいは想像された前世紀の動物)を思わせるところを(たとえばコブコブの尻尾を)残しているのは、誰もが見知っていることであろう。ところが、かれらと闘うウルトラマン、ミラーマンのたぐいは、たとえ人間のかたちをしていても、むしろ怪獣の逆に、まったく哺乳類くささのないのが通例である。科学者(または神のような超科学者)によって造られた純然たるロボットであることもあるし、おなじ科学的処理をへた改造人間である場合も多い。アンドロメダ星雲からやってきた使節であるというような場合も、そのもとの宇宙的故郷は、それ全体が科学工場であるような徹底して科学的な惑星として想定されているのである。かれらはみな体内に、超大型の原子力潜水艦でも装備しきれぬほどの機械的能力をひそめており、一様にロボットめいた機械的な身のこなしにおいてエネルギーを発する。

かれらウルトラマン、ミラーマンたちこそは、ありとある科学の精とでもいうべき巨人たちとして想定されているのである。^③そこで問題が生じることになるであろう。たとえば核兵器という、科学の典型について同じ問題を類推してみれば、こういうことになるにちがいない。すなわち、科学の精・核兵器にはふたつの側面がある。それは大破壊力において、科学の威力を示している。かつそれが人間の頭上にもたらす悲惨の大きさを、この科学の精はあらわしている。そして科学としての医学は、おなじ現代科学のもたらしたこの人間的悲惨と闘う力をなお十全には持ちえていない。そこからあらためてウルトラマン、ミラーマンの場合にかえる時、問題はいかにも明瞭に見えてくるだろう。

怪獣映画の超人スターたちは、もっぱら科学の威力を示威するだけの存在である。かれらは科学のもたらす人間的悲慘とまったく無関係な超能力として、空をかけり地にもぐり、怪獣どもを撃滅する。ドラマの展開のうえでかれらの超能力の出現する前に、まず一般の人間たちの無力がつねに誇示されることも忘れてはならぬだろう。怪獣にたいして、一般の市民は、あるいは人民はまったく無力だ。かれらは自分の生活圏を不当に踏みにじられて、嘆きつつ怪獣を見あげるのみである。特別任務をおびた準科学的集団が、しばしば自衛隊の機動力とともに、怪獣と闘う。それが人間による努力の限界をあらわすものとしてまず描き出されるのが、怪獣映画の一般式である。その反撃力だけで、たとえば大都市における「治安出動」には十分すぎるほどであろうと思わせる規模の、しかしついには怪獣に対して無力な人間による作戦が終って、攻撃の専門家たちもまた無力感におちいる時、宇宙の果てから、地球の端から、ウルトラマンが、ミラーマンがやってくる……

人間の側から、これら超人間科学スターと独自の関係をひらくのが、ほとんどいかなる怪獣映画の場合にも、優等生の子供とまことに人格高潔な科学者である。そして、その逆に怪獣どもとひそかな連絡をとっている悪人集団には、たいいてい気狂い科学者がいる。地球上の人間にその責任のある科学の悪、科学のもたらす人間的悲慘は、すべてこの気狂い科学者にひっかぶせられる。それが科学の悪であり、科学のもたらした人間的悲慘である以上、超人間科学スターたるウルトラマンたちに人間の側でつらなっている善良、高潔な科学者のほうにもまた連帯責任があるのではないか、という疑いは、その怪獣映画に熱中している子供の想像力^⑤にむけてみじんもほめかされることはない。もしそれを疑う子供がいたとしても、なにほどのことがあるろう？ 人格高潔な科学者にしてからが、結局ウルトラマンの大活躍のあと地球が滅亡の危機をまぬがれれば、あらためて宇宙へむけて飛びかえるウルトラマンを、ただおとなしく見おくるだけの存在ではないか。人間のやることにたいしたことはないのである……

ウルトラマンやミラーマンの、超人間科学スターの**ムシ**の活動によって(かれらは名誉も報償も求めぬばかりか、地球で燃

料を補給することすらまれである)ブラウン管のまえの子供たちにあたえられる第一の印象は、正義としての科学の威力ということであるにちがいない。科学の絶対的な威力が地球を滅亡から救い、人類に未来をあたえるという、その全面的な正義の保障であるにちがいない。どのような子供の想像力が、ウルトラマンによる科学の威力のうしろに背なかあわせになっている科学の悪、科学のもたらす人間的悲慘に向けて発展してゆきえるだろう？

(大江健三郎「破壊者ウルトラマン」による)

(注) 気狂い……この文章が書かれた一九七〇年代には、こうした表現はそれほど違和感なく使用されていた。

問一 傍線 a、b のカタカナを漢字に直しなさい。

問二 本文中からは次の一文が欠落している。この文を挿入すべき箇所の直前の五字を抜き出しなさい。ただし五字には句読点も含むものとする。

かれらは科学の匂いをたてている。

問三 空欄A～Dにはそれぞれどのような語句が入るか。その組み合わせを示した次の選択肢の内からもっとも適切なものを一つ選びなさい。

- | | | | | |
|---|-----------|-----------|-----------|-----------|
| 1 | A 圧倒的 | B 想像力的 | C 科学的・実証的 | D 自然的 |
| 2 | A 想像力的 | B 科学的・実証的 | C 自然的 | D 圧倒的 |
| 3 | A 科学的・実証的 | B 自然的 | C 想像力的 | D 圧倒的 |
| 4 | A 想像力的 | B 圧倒的 | C 自然的 | D 科学的・実証的 |
| 5 | A 自然的 | B 科学的・実証的 | C 圧倒的 | D 想像力的 |

問四 二つの空欄Xには同じ語が入る。その語としてもっとも適切なものを一つ選びなさい。

- | | | | | | | | | | |
|---|-------|---|--------|---|-------|---|-------|---|-------|
| 1 | クライシス | 2 | メランコリー | 3 | カタルシス | 4 | ナルシズム | 5 | ペシミズム |
|---|-------|---|--------|---|-------|---|-------|---|-------|

問五 傍線①「それ」が指す内容を本文中から八字で抜き出さない。ただし八字には句読点は含まないものとする。

問六 傍線②「怪獣映画という「造られた世界」において、あのようにも暴力において大きい怪獣を造りださざるをえない人間の、想像力の基底にある暗さ、悲惨さ」とあるが、筆者はこうした「暗さ、悲惨さ」の原因がどこにあると考えているか。もっとも適切なものを次の中から一つ選びなさい。

- 1 地球の危機を怪獣によって寓意的に表現し、「造られた世界」である怪獣映画として擬似的に反復することで紛らすしかないほど差し迫った人類滅亡に対する恐怖感
- 2 核兵器という怪獣と同様の暴力性と破壊力を有する、人類を滅ぼしかねない災厄を生み出したのが、実は自然の脅威でなく人間の驕り高ぶりであったことに対する諦念
- 3 善意の人間たちが怪獣によって象徴されている災厄をどんなに克服しようとしたところで、常に邪悪な科学者たちによつてそれが妨害されざるを得ないことに対する絶望感
- 4 怪獣を現実に見立てている災厄に見立てて怪獣映画という「造られた世界」を空想することで、危機を克服したつもりになっている人間の脳天気さにかがわれる救いのなさ
- 5 怪獣が象徴している巨大科学の破壊的な側面は現実世界に実際に存在しており、しかもそれがもたらす災厄を克服する術が現在の人類にはないという無力感

問七 傍線③「そこで問題が生じることになるであろう」とあるが、筆者はなにが「問題」であると考えているのか。もっとも適切なものを次の中から一つ選びなさい。

- 1 科学がもたらした悲慘を救済する科学的な手立てが実際にはないのに、科学の化身であるウルトラマンやミラーマンがあたかもそれを埋め合わせるかのように空想されていること
- 2 科学には二つの側面が存在していて、想像を絶する威力を持つという一面の背後に、それが人間に悲慘をもたらすというもう一つの面があることが見過ごされていること
- 3 巨大科学や核兵器などが実際に使用された結果としてわれわれにもたらされる人間的悲慘や災厄に対して、人類がいまだに有効な方策を講じる見通しが立っていないということ
- 4 人類はこれまで高度な科学を産み出し、その威力を示威してきたが、大規模な自然災害やその象徴である怪獣の前ではあまりにも無力で卑小な存在に過ぎないということ
- 5 科学がもたらした災厄の救済者として登場するウルトラマンやミラーマンが一見人類の味方であるように見えながら、実は人間的悲慘を意に介さぬ超人的な能力の持ち主であること

問八 傍線④「超人間科学スターたるウルトラマンたちに人間の側でつらなっている善良、高潔な科学者のほうにもまた連帯責任があるのではないか」とあるが、なぜそのようにいえるのか。その理由としてもつとも適切なものを次の中から一つ選びなさい。

1 善良な科学者が総力を尽くしても怪獣の猛威を取り除くことができず、最終的にウルトラマンやミラーマンといった超自然的な力に頼らざるを得なかったから。

2 善良で高潔な科学者も、気狂い科学者による科学の悪用や怪獣の破壊行為との結託を食い止め、彼らを思いとどまらせることができなかった事実には責任があるから。

3 科学の負の側面を怪獣や気狂い科学者に押しつけることで、高潔な科学者は正しい側に立っているように見えるが、科学技術の開発推進の当事者という点で両者は同罪であるから。

4 科学者の意図がどんなに善良で高潔であったとしても、人間的悲惨や災厄をもたらし人類を滅亡に追いやりかねない科学の負の側面を子供たちに説明する義務を怠っているから。

5 気狂い科学者といえども最初は人類の平和と発展を願う高潔で善良な科学者であったはずで、気狂い科学者と高潔で善良な科学者とを人間性の観点で区別することはできないから。

問九 傍線⑤「想像力」とあるが、その意味としてもっとも適切なものを次の中から一つ選びなさい。

- 1 現実にある困難を、空想の中で具体的にイメージし、その克服を果たす問題解決能力
- 2 現実には存在しない理想的で完全な架空の社会像や人物像をイメージの中で創り上げる能力
- 3 差別され迫害される被害者の立場に立って、虐げられた人びとのことを思いやれる共感の能力
- 4 過去の体験や歴史的事実、現在の正確な知識を踏まえつつ、未来のあるべき姿をイメージすること
- 5 最悪の場合を常に想定しながら行動する、人類が歴史の中で培ってきた危機回避のための知恵

問十 この文章の筆者は「怪獣映画」が持つ「メッセージ」をどのようなものと捉えているか。もっとも適切なものを次の中から一つ選びなさい。

- 1 人類は科学を万能だと思い込み科学に頼りきってきたが、結果として科学による滅亡の道をひたすら歩んでいる。
- 2 科学はその絶対的な威力で地球を滅亡から救うという正義の側面とともに、裏面に悪の要素も隠し持っている。
- 3 現代社会には、はっきり意識されないにしろ個人の力ではどうにもできない破壊的な圧力がのしかかっている。
- 4 人間が困難に直面した際、まず人知を尽くし最善を尽くすことが大切で、その後によりやく奇跡は訪れるものだ。
- 5 現代の人間には、科学では克服不可能な超自然的な存在に対して古来人類が抱いてきた畏怖や尊敬の念が欠如している。

次の文章を読み、後の問に答えなさい。

晩秋のある日、陽ざしの明るい午後だったが、ラジオが洋楽をやり出すと間もなく、部屋の隅から一匹の蜘蛛が出て来て、壁面でおかしな挙動を始めたことがある。

今、四年目に入っている私の病気も、一進一退というのが、どうやら、進の方が優勢らしく、春は春、秋は秋と、年ごとの比較が、どうも香しくない。目立たぬままに次第弱りというのかも知れないが、それはとにかく、一日の大半を横になって、珍しくもない八畳の、二、三ヶ所雨のしみある天井を、まじまじと眺めている時間が多いこの頃である。

もう寒いから、羽虫の類は見えないが、蠅どもはその米杉の天井板にしがみついている、陽のさす間は、縁側や畳に下りてあつちこつちしている。私の顔なんかにもたかつて、うるさい。

蠅の他に天井や壁で見かけるのは、蜘蛛である。灰色で、薄斑のある大きな蜘蛛だ。左右の足を張ると、障子のひとこまの、狭い方からはみ出すほどの大きな蜘蛛だ。それが何でもこの八畳のどこかに、二、三匹はひそんでいるらしい。一度に二、三匹出て来たことはないのだが、慣れた私の目には、あ、これはあいつだ、と、その違いが直ぐ判る。

壁面でおかしな挙動を見せた奴は、中で一番小さいかと思われる一匹だった。レコードの、「チゴイネル・ワイゼン」——昔、私も持っていたことのあるヴィクターの、ハイフェッツ演奏の赤の大盤に違いなく、鳴り出すと私には直ぐそれと判ったから、何か考えていたことを放り出し、耳は自然とその派手な旋律を迎える準備をした。

やがて、ぼんやり放っていた視線の中に、するすると何かが出て来たが、それが蜘蛛で、壁の角からするすると一尺ほど出て来たと思うと、ちよつと立ち止まった。見るともなく見ていると、そいつが、長い足を一本一本ゆつくりと動かして、いくらか弾みのついた恰好で壁面を歩き廻り始めたのだ。蜘蛛の踊り——とちよつと思つたが、踊るといふほどはつきりした動作

ではない、曲に合わせてどうこうというのではなく、何かこう、いらいらしたような、ギクシャクした足つきで、むやみとその辺を歩き廻るのだ。

——浮かれ出しやがった、と私は半ば呆れながら、可笑しがった。幾分、不思議さも感じた。牛や犬が、音楽——人間の音楽にそえられることがあるとは聞いていたし、殊に犬の場合は、私自身実際に見たこともあるのだが、蜘蛛となると、ちよつとそのままには受け取りかね、私は疑わしい目つきを蜘蛛から離さなかつた。曲が終わつたら彼はどうするか、そいつを見落とすまいと注視をつづけた。

曲が終わつた。すると蜘蛛は、A といった様子で、静止した。それから、急に、例の音もないするるとしたすばしい動作で、もとの壁の隅に姿を消した。それは何か、しまった、というような、少しづつ受けた感じは、確かにそれに違ひなかつた。——だった、とはつきりいうのもおかしいが、こつちの受けた感じは、確かにそれに違ひなかつた。

蜘蛛類に聴覚があるのかないのか私は知らない。ファーブルの「昆虫記」を読んだことがあるが、こんな疑問への答えがあつたかなかつたかも知覚えていない。音に対して我々の聴覚とは違う別な形の感覚を具^aえている、というようなことがあるのか。つまり私には何も判らぬのだが、^①この事実を偶然事と片づける根拠を持たぬ私は、その時ちよつと妙な感じを受け^②た。これは油断がならないぞ、先ずそんな感じだった。

このことに関連して、私は、偶然蜘蛛をある期間閉じ込めたことのあるのを憶い出す。

夏の頃、暑いうちはいくらか元気なのが例の私が、何かのことで空瓶が要つて、適当と思われのを一本取り出し、何気なくセンをとると、中から一匹の蜘蛛が走り出て、物陰に消えた。足から足まで一寸か一寸五分の、八畳の壁にいる奴とは比較にならぬ小型のだったが、色は肉色で、体はほっそりしていた。

瓶から蜘蛛が出て来たので、私はちよつと驚いた。私は記憶を辿つてみた。これらの空瓶は、春の初め、子供たちにいつけて綺麗に洗わせ、中の水気を切るため一日ほど倒さにして置き、それからゴミやほこりの入るのを防ぐためセンをして、何かの空箱にまとめておいたものだ。蜘蛛が入ったのは、その一日の間のことに違いない。

出口をふさがれた彼は、多分初めは何とも思わなかつたろう。やがて何日か経ち、空腹を感じ、餌を捜す気になって、そこで自分の陥っている状態のどんなものかをさとつただろう。あらゆる努力が、彼に脱走の不可能を知らしめた。やがて彼は、じたばたするのを止めた。彼はただ、凝つと、機会の来るのを待った。そして半年——。私がセンをとつた時、蜘蛛は、実際に、B、という素速さで脱出した。それは、スタート・ラインで号砲を待つ者のみが有つ素速さだった。

それからもう一度。

八畳の南側は縁で、その西はずれに便所がある。男便所の窓が西に向つて開かれ、用を足しながら、梅の木の間を通して、富士山を大きく眺めることが出来る。ある朝、その窓の二枚の硝子戸ガラスの間に、一匹の蜘蛛が、閉じ込められているのを発見した。昨夜のうちに、私か誰かが戸を開けたのだろう。一枚の硝子にへばりついていていた蜘蛛は、二枚の硝子板が重なることによつて、幽閉されたのだ。足から足三寸ほどの、八畳にいるのと同種類の奴だった。硝子と硝子の間には彼の身体を圧迫せぬだけの余裕があつても、重なつた戸のワクは彼の脱出を許すべき空隙ほを持たない。

私は、前の、空瓶の場合を直ぐ憶い出した。今度は一つ、彼の行末を見届けてやろう、そんな気を起した。私は家の者どもに、その硝子戸を閉めるな、といいつけた。空瓶中の蜘蛛は、約半年間何も喰わず、粗雑な木のセンの、極めて僅かな空隙からする換気によつて、生きていた。今度のは、丸々と肥えた、一層大きな奴だ、こいつとの根気比べは長いぞ、と思つた。

用便のたび眺める富士は、天候と時刻とによつて身じまいをいろいろにする。晴れた日中のその姿は平凡だ。真夜中、冴え渡る月光の下に、鈍く音なく白く光る富士、未だ星の光が残る空に、頂近くはバラ色、胴体は暗紫色にかがやく暁方の富士

——そういう富士山の肩を斜めに踏んまえた形で、蜘蛛は凝つとしてゐるのだ。彼はいつも凝つとしていた。幽閉を見つけ出したその時から、彼のあがきを一度も見たことはなかった。私が、根気負けの気味で「こら」と指先で硝子を弾くと、彼は、仕方ない、といった調子で、僅かに身じろぎをする。それだけだった。

一と月ほど経って、彼の体軀が幾分やせたことに気づいた。

「おい、便所の蜘蛛、やせて来たぜ」

「そうらしいです。可哀そうに」

「蜘蛛の断食期間は、幾日ぐらいたろう」

「さあ」

妻は興味ない調子だ。つまらぬ物好き、蜘蛛こそ迷惑、といった調子だ。私は妻のその調子にどこか抵抗する気持で、

「とにかく、逃がさないでくれ」といった。

更に半月たった。明らかに蜘蛛は細くなって来た。そして、体色の灰色が幾分かあせたようだ。

もう少して二ヶ月になるというある日、それは、壁間の蜘蛛の散歩を見た何日かの後だった。便所の方で、「あ」という妻の声らし、つづいて「逃げた」ときこえた。相変らず横になってぼんやりしていた私は、蜘蛛を逃がしたな、と思つたが、それならそれでいいさ、という気持で黙っていた。

——いつも便所掃除のときは、硝子戸を重ねたまま動かしたりして蜘蛛の遁走には気をつけていたのだが、今日はうっかり一枚だけに手をかけた、半分ほど引いて気がついたときは、もう及ばなかった、蜘蛛の逃げ足の速いのに驚いた、まるで待ちかまえていたようだ——そんな、いいわけ混りの妻の説明を、私は、うんうんときき流し、命真加な奴さ、などとつぶやいた。実のところ、蜘蛛を相手の根気くらべも大儀になっていたのだ。^④とにかく片がついた、どつちかといえ、好い方へ片が

ついた、そんなふうと思った。

私がこの世に生れたその時から、私と組んで二人三脚をつづけて来た「死」という奴、たのんだわけでもないのに四十八年間、黙って私と一緒に歩いて来た死というもの、そいつの相貌が、この頃何かしきりと気にかかる。どうも何だか、いやに横風なつらをしているのだ。

そんな飛んでもない奴と、元来自分は道づれだったのだ、と身にしみて気づいたのは、はたちちよつと前だったろう。つまり生を意識し始めたわけだが、ふつうとくらべると遅いに違いない。のんびりしていたのだ。

二十三から四にかけて一年ばかり重病に倒れ、危うく彼奴あいつの前に手を挙げかかったが、どうやら切り抜けた。それ以来、くみしやすしと思つた。もつとも、ひそかに思つたのだ。大つぴらにそんな顔をしたら彼奴は怒るにきまつている。怒らしたら損、という肚だ。急に歩調を速めだしたりされては迷惑する。

こういうことを仰々しく書くのは気が進まぬから端折るが、つまるところ、こつちは彼奴の行くところへどうしてもついて行かねばならない。じたばたしようとしまいと同じ——このことは分明的だ。残るところは時間の問題だ。時間と空間から脱出しようとする人間の努力、神でも絶対でもワラでも、手当たり次第擱もうとする努力、これほど切実で物悲しいものがあるうか。一念万年、個中全、何とでもいうがいいが、観念の殿堂に過ぎなからう。なぜ諦めないのか、諦めてはいけないのか。だがしかし、諦め切れぬ人間が、次から次と積み上げた空中楼閣の、何と壮大なことだろう。そしてまた、何と微細織巧を極めたことだろう。——天井板に隠現する蜘蛛や蠅を眺めながら、他に仕方もないから、そんなことをうつらうつらと考えたりする。

(尾崎一雄「虫のいろいろ」による)

(注) 一寸か一寸五分……一寸は約三センチメートル、五分はその半分。

問一 傍線 a、b の漢字の読み方をひらがなで書きなさい。

問二 空欄 A、B に入る表現として適切なものを次の中から一つずつ選びなさい。

- | | | | | | |
|---|--------|---------|-----------|----------|----------|
| A | 1 卒然 | 2 悠然 | 3 毅然 | 4 悄然 | 5 超然 |
| B | 1 渡りに舟 | 2 悠揚迫らず | 3 光陰矢のごとし | 4 間髪を入れず | 5 寸暇を惜しむ |

問三 傍線①「この事実」にあてはまる内容として適切ではないものを次の中から一つ選びなさい。

- 1 長い足を一本一本ゆつくりと動かして、いくらか弾みのついた恰好で壁面を歩き廻り始めたのだ。
- 2 壁の角からするすると一尺ほど出て来たと思うと、ちよつと立ち止まった。
- 3 一度に二、三匹出て来たことはないのだが、慣れた私の目には、あ、これはあいつだ、と、その違いが直ぐ判る。
- 4 ギクシヤクした足つきで、むやみとその辺を歩き廻るのだ。
- 5 急に、例の音もないするるとしたすばしい動作で、もとの壁の隅に姿を消した。

問四 傍線②「これは油断がならないぞ」とあるが、なぜそう考えたのか。その理由としてもっとも適切なものを次の中から一つ選びなさい。

- 1 曲が終わった時の蜘蛛の様子から、蜘蛛は主体的に事態を見極めて判断しているように見えたから。
- 2 あたかも曲に合わせるかに見える動作から、蜘蛛の動物的な本能の確かさを見せつけられたから。
- 3 蜘蛛は浮かれているように見えて、実は人間を観察し欺こうとしているのではないかと思つたから。
- 4 実は蜘蛛には聴覚以外の我々に未だ知られていない感覚が備わっていると考えざるを得ないから。
- 5 音楽の流れに合わせたかのような、蜘蛛の臨機応変な行動の意外さにすつかり感銘を受けたから。

問五 傍線③「それならそれでいいさ」とあるが、なぜそう思つたのか。その理由としてもっとも適切なものを次の中から一つ選びなさい。

- 1 自分にとつての蜘蛛の存在の大切さを妻は一向に理解していないように思えたから。
- 2 妻の受け答えからして、自分の行動に妻はあまり賛成していないことがわかつたから。
- 3 二ヶ月もの間蜘蛛の様子を絶えず気にかけていると、自分の病気が悪化しかねないから。
- 4 蜘蛛を閉じ込めていたずらにその生死を左右することに良心の呵責を覚えたから。
- 5 そもそも気まぐれから蜘蛛を閉じ込めたが、妻が逃がしたことで決着がついたから。

問六 傍線④とにかく片がついた、どっちかといえは、好い方へ片がついた、そんなふうに思った」とあるが、それはどういう意味か。その説明としてもっとも適切なものを次の中から一つ選びなさい。

- 1 蜘蛛の観察から解放され、自分の病が悪化せずにすんだ。
- 2 徐々に愛着を持ち始めていた蜘蛛を救うことができた。
- 3 蜘蛛との根比べを引き分けに持ち込むことができた。
- 4 自分が蜘蛛の生殺与奪を左右する立場から解放された。
- 5 不注意に蜘蛛を逃がした妻の顔を立てることができた。

問七 傍線⑤「くみしやすしと思った」とあるが、何とくみしやすいか。文中の語で答えなさい。

問八 傍線⑥「なぜ諦めないのか、諦めてはいけないのか」とあるが、何を諦めるのか。もっとも適切なものを次の中から一つ選びなさい。

- 1 観念の殿堂の構築
- 2 仰々しく書くこと
- 3 空中楼阁の創造
- 4 時空からの脱却
- 5 生に対する執着

問九 傍線⑦「天井板に隠現する蜘蛛や蠅を眺めながら、他に仕方もないから、そんなことをうつらうつらと考えたりする」と

あるが、筆者はどんなことを考えているのか。それを説明したものとして適切なものを次の中から一つ選びなさい。

- 1 蜘蛛が硝子戸からの脱出に成功したように、たとえ死から逃れられないにしても、希望を決して捨ててはいけな
- 2 蜘蛛や蠅と同様、人間も死を前にして無力だが、人間は生や死をめぐる思考を紡ぎだすことでそれを受け入れる。
- 3 じっとしていただけの蜘蛛が妻に逃がしてもらったように、思いもかけぬところから偶然の救いがある。
- 4 蜘蛛や蠅の行動を観察していると、人間が時空を超え死に抗おうとしてじたばたするのは所詮無駄だとわかる。
- 5 蜘蛛が音楽に合わせて踊り出したように、生き物は皆科学を超えた自然の絶妙なメカニズムにあやつられている。

問十 周辺の小動物を観察して、それに自身の健康状態や死生観を重ね合わせた作品を次の中から一つ選びなさい。

- 1 横光利一「蠅」
- 2 芥川龍之介「或阿呆の一生」
- 3 志賀直哉「城の崎にて」
- 4 正岡子規「仰臥漫録」
- 5 島崎藤村「桜の実の熟する時」

三

異なる状況で詠まれた三つの連歌の実作について解説をしている次の文章を読み、後の問に答えなさい。

① 連歌こそ、世の末にも、昔におとらず見ゆるものなれ。昔もありけるを、書きおかざりけるにや。

躬恒

A

貫之

なれるこのみやうみわたるらむ

これは、躬恒と貫之とが、具してものへまかりけるに、おく山に、そま人の木ひく音の、ふね漕ぐに似たりければ、聞きてしけるとぞ。

(中略)

重之

② 雪ふればあしげに見ゆるいこま山

幸文太

② いつなつかげにならむとすらむ

これは、為正が、河内の守にて侍りける時、雪の降りたりける朝に、つれづれなりければ、かみのさうしをたてこめて、郎党どもを呼びあつめて、酒などのみけるに、源の重之が、ものへまかるついでに、まうで来たりければ、よろこび騒ぎて、饗じける。おのおの酔ひて、さうしを押しあけて、眺めやるに、雪に埋れたる山の見えければ、「あれは、いつれの山ぞ」と、問ひければ、「あれこそは、高名のいこまの山よ」と、為正がいひけるを聞きて、かく申したりけるを、たびたび詠じて、付けむとしけるに、いかにも、え付けざりけるけしきを見て、かくしあるきける、あやしのさぶらひの付けたり。げに、けしきの見

えで、そらしはぶき高やかにして、人よりけに、あいでて、けしきしければ、重之見て、「幸文太 B、付けげに C」といひければ、為正、「かたはらいたく、みぐるしき事なり」と押しこめて、いはせざりければ、引き入りてやみにけり。なほ、為正、え付けで、程すぎにければ、わびて、「さば申せ。いかに付けたるぞ」と問ひければ、しばし、きそくしていはざりければ、重之、しきりにせめければ、いひいでたりけるに、為正、したなきしてあさみけり。重之、聞きけるままたに、立ちて舞ひければ、えたへで、きぬぬぎて、かつけてける。まことに、さむげなりけるに、きぬかれて、のけはりて出できたりけるけしき、いみじかりけりとぞ。

(中略)

永源法師

田にはむ駒はくろにぞありける

永成法師

なはしろの水にはかげと見えつれど

田には、畔と申す所のあるに、馬にも、黒毛と申す馬のあるに、苗代水に、かげと見えつるは、くろにぞありけると、いへることは、まことにたくみなり。

(源俊賴『俊賴髓』による)

(注) あしげ……茸毛。馬の毛色で白い毛に黒、濃褐色にさし毛のあるもの。

かげ……鹿毛。鹿の毛のように茶褐色で部分的に黒の交じるもの。

したなき……舌鳴。舌打ち。

あさみ……浅む。驚きあきれる。

のけはる……ふんぞり返る。

問一 傍線①で述べられている筆者の考えと合致するものを次の中から一つ選びなさい。

1 口頭での芸能である連歌は、昔から人々に親しまれており、書き残されてきた歌からかつての人気の様子をうかがい知ることができる。

2 口頭での芸能である連歌は、今の時代も昔と同じように人気であり、詠まれた歌は昔から書き残され、受け継がれてきたようだ。

3 口頭での芸能である連歌は、昔も今に劣らず親しまれ行われていたが、その頃詠まれた歌は残念ながらあまり書き残されてこなかったようだ。

4 口頭での芸能である連歌は、昔は盛んに詠まれていたが、歌が書き残されてこなかったので、人気が衰え、人々は和歌を好むようになった。

5 口頭での芸能である連歌は、昔は人々に親しまれていたが、世の末になると詠まれた歌が書き残されなくなり、やがて人気は衰えた。

問二 空欄Aに入る句として適切なものを次の中から一つ選びなさい。

1 おく山に船こぐ音のきこゆるは

2 うなはらの沖ゆく船のこぐ音は

3 おく山に紅葉ふみわけ鳴く鹿の

4 世の中は常にもがもななぎさこぐ

5 もろともに我をも具して散りね花

問三 傍線②の連歌の解釈として適切なものを次の中から一つ選びなさい。

1 重之が、冬に雪が降り、生駒山を越えられずに足留めされている我が身を嘆いたのを受けて、幸文太が、夏の山陰を馬に乗って移動できるようになるのはいつのことだろうかと応答した。

2 重之が、冬場に雪が降り積もった生駒山は、馬の葦毛のようで見栄えが悪いと評したのに対し、幸文太が、生駒山は一体いつ夏の馬の毛並みのように美しい景色に戻るのだろうかと応答した。

3 重之が、冬場の生駒山は雪で悪路になり、馬では越えられないと批判したのに対し、幸文太が、夏場でも山陰に雪が残っているので、馬で越えられるのはいつになることかと応答した。

4 重之が、冬に雪が降ると、生駒山は馬の毛並みの葦毛のように見えると詠んだのに対し、幸文太が、雪が解け、懐かしい景色が再び現れるのはいつのことだろうと応答した。

5 重之が、雪間に山肌が交じる生駒山の景色を、馬の毛並みの葦毛に喩えたのを受けて、幸文太が、生駒山を馬に喩え、一体いつ夏の鹿毛の毛並みになろうとするのだろうかと応答した。

問四 傍線アから才の動作主の組み合わせとして適切なものを次の中から一つ選びなさい。

- | | | | | | |
|---|-------|-------|-------|-------|-------|
| 1 | ア 為正 | イ 重之 | ウ 為正 | エ 幸文太 | オ 重之 |
| 2 | ア 幸文太 | イ 為正 | ウ 幸文太 | エ 為正 | オ 重之 |
| 3 | ア 重之 | イ 幸文太 | ウ 重之 | エ 為正 | オ 幸文太 |
| 4 | ア 為正 | イ 重之 | ウ 幸文太 | エ 幸文太 | オ 為正 |
| 5 | ア 重之 | イ 幸文太 | ウ 幸文太 | エ 為正 | オ 重之 |

問五 傍線③の文の説明として適切なものを次の中から一つ選びなさい。

1 重之が、思いついた言葉を何度となく声に出して、自分の句を続けようとして、さも続けられたかのように振舞っている様子

2 為正が、重之の句を幾度も口ずさんで、自分の句を続けようとしたのだが、どうやっても続けることができそうな様子

3 重之が、為正の句を何度となく口にして味わい、評価点を付けようとしたのだが、実力が伴わずにうまく付けられないでいる様子

4 為正が、幸文太が呟いた句を何度も口ずさんで、どこかに難癖を付けようとしたのだが、どうしても付けられそうにない様子

5 為正が、重之の句を何度も声に出し、その句に新たな面白みを付け加えようとしたのだが、うまく作り変えられそうにない様子

問六 空欄B・Cに入る言葉の組み合わせとして正しいものを次の中から一つ選びなさい。

1 B なむ C はべれ

2 B なむ C はべり

3 B ぞ C はべり

4 B こそ C はべれ

5 B こそ C はべる

問七 傍線④「立ちて舞ひければ」とあるが、それはなぜか。その理由として適切なものを次の中から一つ選びなさい。

- 1 自分が詠んだ句にうまく句を続けられなかった為正を批判する気持ちを伝えようとしたから。
- 2 自分が詠んだ句と幸文太が続けた句とが調和しているのかどうかを確認したかったから。
- 3 幸文太が詠んだ句を為正が嘲笑するので居心地がわるく、その場を取り繕おうとしたから。
- 4 自分が詠んだ句に対して、他人がうまく句が続けられた時には舞わなければならないから。
- 5 自分が詠んだ句に対し、意外にも幸文太が機転の効いた句を続けたことに感銘を受けたから。

問八 傍線⑤「まことにたくみなり」とあるが、永源法師と永成法師が詠んだ連歌について筆者がそのように考える理由として適切ではないものはどれか。次の中から一つ選びなさい。

- 1 永源法師の句では、「くろ」と呼ばれる田の畔に、そこで草をはむ馬の毛色の「黒(くろ)」が掛けられているから。
- 2 永源法師の句では、田で草をはむ馬が写實的に描かれるのに対し、永成法師の句では苗代水に映る馬の姿が幻想的に描写されているから。
- 3 永成法師の句では、田の苗代水に映る馬の「影(かげ)」に、馬の毛色の「鹿毛(かげ)」が掛けられているから。
- 4 永源・永成両法師の句では、田の縁語である「畔」と「苗代水」、馬の縁語である「黒」と「鹿毛」が詠まれているから。
- 5 永源法師の句では、畔にいる馬の姿が詠まれるのに対し、永成法師の句では異なる視点から苗代水に映る馬の姿が詠まれているから。

問九 問題文から考えられる連歌の意義として適切ではないものはどれか。次の中から一つ選びなさい。

- 1 複数の詠み手が紡ぎ出した個性豊かな連歌を鑑賞することで、当時の個人の内面の奥深さを理解できる。
- 2 連歌の出来の良し悪しは、詠み手の社会的な地位や身分とは無関係に、その人物を判断する評価の目安となる。
- 3 詠み手の機知のある連歌によって、日常生活における些細な出来事が新鮮なものとして捉え直される。
- 4 連歌の言葉の掛け合いは、詠み手の思いを伝え、受け手の考えを理解する格好のコミュニケーションとなる。
- 5 人々が即興で言葉を紡いでいく連歌では、複数の詠み手の想像力によって、詠まれる世界が躍動的に展開する。

